

英国昔話「ぼろぎれ娘」に関する覚え書

野呂有子

「ぼろぎれ娘」は、独特の雰囲気を持つ昔話である。再話者のジョセフ・ジェイコブズは、‘folk-novel’の呼び名を与える事によって、物話の持つ独特の雰囲気の特殊性を表現している。¹又、坂井晴彦氏は、物語の特徴として「魔法の笛の話のをのぞけば、民話独特の超自然的要素が殆どなく、(誇張はあるにせよ)小説的要素がいちじるしいこと」を指摘している。²

しかしながら、この覚え書きでは、ジャンルの問題を扱うのではなく、一人の amateur がユング派の概念の助けを借りて、物語を考えるという立場をとる事を前もってことわっておこう。

さほど長い話ではないので、以下に全文を引用する。³

「ぼろぎれ娘」

むかしむかし、海の近くの大きな城に、すごい金持ちの、年取った領主^{りょうしゅ}が住んでいました。領主には妻もなく子もなく、たった一人、幼い孫娘だけが残されていました。領主は、この孫娘をひどく嫌っていて、その顔を決して見ようとはしませんでした。といたしますのも、この子を生んだために、可愛がっていた領主の一人娘が死んだからでした。年とった乳母が赤ん坊を見せに来た時のことでした。「赤ん坊が生きようが死のうが知った事ではない。けれど、子供が生きている限り、顔なぞ決して見るものか。」領主は心に誓いました。

誓いをすますと、そばを置いて窓辺に座りました。そして、海を見やりながら、死んだ娘を思って大つぶのなみだを流して泣きました。それでどうとうまいには、しらがのひげとかみの毛がのびて肩にかかり、椅子にまきつきからみつき、床をつたうと割れ目に入り込んで行きました。なみだのほうは、窓の下の石台に落ちて、台をけずって水路をつくり、小さな川となって大海に流れていきました。そうこうするうちに、孫娘は、世話してくれる人も着物をきせてくれる人もいないまま、大きくなってきました。ただ一人、乳母だけが、そばに誰もいないまに、台所から残飯をひとさらとがらくたぶくろからぼろぼろのペティコートを一枚持ってきてくれるのでした。お城にいる他の召使い達ときたら、娘をぶって「ぼろぎれ娘」と呼んで、おき出しの肩やはだしの足を指さしてあざけりました。それでどうとうまいには、娘は泣きながら逃げていくと、やぶの中にかくれました。

¹ テキストは、研究社出版、坂井晴彦編註の *More English Fairy Tales* に収められている ‘Tattercoats’ を使用した。このジェイコブズの comment も同書 p. 149 に見られる。

² *Ibid.*, p. 149.

³ 訳は筆者の手になるものである。

こうして、娘は育っていきました。食べる物も着る物もほとんどないまま、野原や道ばたで、その日その日を送っていきました。ただ一人、がちょう番だけが友だちでした。おなかがペコペコの時、寒い時、つかれた時に娘のために少年はよく笛を拭いてくれたものでした。笛の音があんまり楽しいので、いやな事はみな忘れて、ガーガーさわくがちょうのおれを相手にして娘は踊り始めるのでした。

とある日の事でした。人々の言う事には、王様が国中を旅行していて、国中のすべての領主と淑女を招いて近くの町で大舞とう会を開くという事でした。その時に、王様の一人息子の王子様が奥方を選ぶ事になっているのだそうでした。

王様の招待状は、海の近くの城にも届けられ、召使い達がそれを持って領主の所へあがっていききました。領主は、まだ窓辺に座っていました。まっ白な長い毛につつまれて、自分のなみだできている小さな川に向かって泣いていました。

とはいえ、王様の命令です。領主はなみだをふくと、毛をたち切ってからだを自由にするために、大ばさみを持ってこいといいました。といたしますのも、自分の毛にがんじがらめにしばられて、身動きもできない囚人のようになっていたからです。さて、ごうかな着物と宝石を取りにやらせて身につけると、白い馬にきんらんどんす金襴緞子のくらをおくようにいつけました。それに乗って王様に会いにいこうというわけです。

そうこうするうちに、町でせい盛大なもよお催しがあるという話は、ぼろぎれ娘のところにも伝わってきました。娘は、台所の入り口に座って泣きました。だって、娘にはそれを見に行くことができないんですもの。泣き声を聞きつけて、年とった乳母は領主の所へ行きました。王様の舞とう会に孫娘と一緒に連れていこうとたのみました。

けれども、領主は顔をしかめて、「黙れ。」と言っただけでした。召使い達はといえば、あざけり笑いながらこう言いました。「ぼろぎれ娘はぼろを着てがちょう番と遊んでれば幸せなのさ。ほっとけ、ほっとけ。やっこさんにはそいつがお似合いってとこだ。」

二度、三度と、年とった乳母はお願いしました。そのたんびに、じろりとにらまれ、厳しくかられるばかりです。そしてとうとうまいには、いじのわるい召使い達にぶたれてあざけられて部屋から追い出されてしまいました。

事がうまくゆかないので泣きながら、乳母はぼろぎれ娘をさがしました。けれども、娘は、料理番に戸口から追いたてられてしまっていました。友達のがちょう番のところへかけて行くと娘は言いました。「なんて不しあわせなことでしょう。王様の舞とう会にいけないなんて。」

話を聞くとがちょう番は言いました。「元氣をお出し。一緒に町へ行こうじゃないか。王様やすてきな

ものをみんな見に。」娘が悲しそうにボロボロの服やはだしの足を見おろすと、がちょう番は一、二曲、笛をふいてきかせてくれました。そのねいろがあんまり明るく楽しかったので、娘はいやな事もなみだの事もすっかり忘れてしまいました。気がつくと、娘は少年と手をつないでいました。がちょうのおれを先にしておどりながら、二人は町をめざして道を下っていきました。

まもなく、すばらしい服を着たりりしい若者が馬に乗ってやってきました。二人の前で馬を止めると、王様がおられる城はどこにあるのかたずねました。そして、この二人がそこへ行く途中だと知ると、馬からおりて、ずっと一緒に歩いていきました。がちょう番が笛をとりだして、そっと甘い曲をふいてきかせますと、この見知らぬ若者は何度も何度も娘のかわいい顔をのぞきこみました。そしてとうとうしまいには、心の底から娘を好いて、結婚を申しこむほどでした。

けれども、ぼろぎれ娘は笑いながら、金髪の頭を横にふるばかりでした。娘は言いました。「がちょう番の娘なんか奥さんにしたら、大恥おおはじをかきますよ。今夜王様の舞とう会にお行きなさい。そして、そこで出会う御婦人たちの一人に申しこみをしなさいな。びんぼうなぼろぎれ娘なんか、相手にしてはいけないわ。」

娘がこばめばこばむ程、小笛は甘くなりひびき、若者は恋心をいっそうつらせるばかりでした。そしてとうとうしまいには、若者はこう言いました。「ぼくの心は変らない。今夜十二時に、王様の舞とう会に来ておくれ。そのまんまのかつこうでいいんだから。がちょう番の少年とがちょうも一緒にくればいい。ぼろぼろのペティコートのまんま、ぼくはおまえとおどるよ。王様や領主や淑女のまんまえて。可愛い、大事な花嫁だっていって、おまえをみんなに紹介するよ。」

夜になると、お城の大広間は光と音楽に満ちあふれ、おおぜいの領主と淑女が王様の前でおどりました。ちょうど時計が十二時をうった時、ぼろぎれ娘とがちょう番は、ガーガーわめくがちょうのおれを従えて、入口の大どびらのところに入りました。大広間をまっすぐ歩きました。両わきでは、淑女達はささやき合い、領主達は笑いこぼしました。そして、むこうはしに座っている王様も、びっくりぎょうてん目を白黒。

娘が玉座のまえまできますと、恋人は王様のとなりの椅子から立ちあがってぼろぎれ娘を迎えました。そして、娘の手をとると、みんなの前で恋人は、三度娘に接吻しました。それから、王様の方におき直ると言いました。「おとう様！」——だって、恋人は王子その人だったのです。「決めましたよ。この人がぼくの花嫁です。国中で一番美しく、国中で一番いとしい人。」

王子がこう言い終らないうちに、がちょう番の少年は唇に笛をあて、そっと二、三曲ふきました。その調べは、はるかかなたの森で小鳥がさえずっているようにひびきわたりました。笛の調べにあわせて、娘のまどっていたぼろぎれは、輝く宝石を縫いこんだ、まぶしいばかりの着物に変わり、金髪

の頭には金の冠がおかれ、^{うしろ}後のがちょうのむれは、長い着物のすそを持ちあげている、上品な小姓の一团になりました。

そして、王様が息子の嫁を迎えようと立ちあがると、らっぱが音高くなりひびいて、この新しい王女を祝いました。すると、お城の外の道にいた人々がロクにいいました。

「ほうら、きこえたかい。今、王子様が、国中で一番美しい娘を奥方に選んだんだよ。」

けれども、あのがちょう番の少年は、にどとあらわれることはなく、^{だれ ゆくえ}誰も行方を知りませんでした。あの年とった領主はといえば、再び、海のそばの自分のお城へ帰っていきました。だって、宮廷にとどまっていることはできませんもの——孫娘の顔など決して見ないと誓ったからには。

だから、今でも、老人は窓辺に座っていますよ——まっ、あなたに見ることができればいいんですけど。いつかそんな日がくるかもしれませんね——海を見ながら、前よりもいっそうひどく泣いているんですよ。

(1) 領主とアニメ⁴

「ぼろぎれ娘」は、父と娘の問題を扱っていると言ってもさつかえないだろう。⁵年老いた領主はヒロインの祖父であって、この二人の関係は厳密な意味では父と娘の関係ではない。この領主には非常に可愛がっていた娘があった。しかし、この娘は、ぼろぎれ娘を生むと死んでしまったのだから、この話では、父と娘の関係が祖父と孫娘の関係におきかえられていると考えることができる。死んだ娘は領主にとってアニメ像の原型であった。孫に対する彼の冷たい態度は、死んだ娘に対する愛情の裏返しととれる。

子供を生むという事は、最愛の娘が結婚したことを示している。我々は、多くの父親が娘の結婚を前にして、一種、裏切りにも似た感情を持つのを知っている。娘に裏切られたという思いは、娘を可愛がっていればそれだけ一層強いものであるかもしれない。

娘が死んだ今、娘を愛した反動がすべてこうして孫娘に向けられてしまった。

祖父の誓いのために、ヒロインは乞食生活を送らねばならなくなる。本来なら、城内で城主の孫として大切に育てられるはずのヒロインは、城にも入れてもらえずに食べる物も着る物もなく野原や道端で生きていく。

祖父は死んだ娘を嘆きつつ窓辺に座って海ばかり見ている。孫娘の顔を見ないと誓った彼が海ばかり

⁴ 男性の心の中のアニメ像、女性の心の中のアニメ像を説明する書としては、河合隼雄「昔話の深層」福音館書店、1977年、(特に pp. 180-219,)C. G. コング著、河合隼雄監訳「人間と象徴」下巻、河出書房新社、1979年版、(特に pp. 36-67)等が有効。

⁵ グリム童話「つぐみの髪の王様」も父と娘の関係を扱っている。cf. 河合隼雄「昔話の深層」pp. 202-205.

野呂有子「英国昔話『ぼろぎれ娘』に関する覚え書」『東京成徳短期大学紀要』第13号（昭和55年）27-34.

見ているのは、一種の補償作用と考えられる。海を見ている間に、毛がからみついて自分を縛りつけ、涙は石をけずってそこに水路を作ってしまう。このくだりは昔話としては奇異な程に文学性の高い描写となっているので、ここに原文を引用してみよう。

So he returned his back, and sat by his window looking out over the sea, and weeping great tears for his lost daughter, till his white hair and beard grew down over his shoulders, and twined round his chair and crept into the chinks of the floor, and his tears, dropping on to the window-ledge, wore a channel through the stone, and ran away in a little river to the great sea.⁶

更に、すぐ後に、この描写はくり返され、そこでは次のように言いかえられている。

…… who (= the old man) still sat by his window, wrapped in his long hair and weeping into the little river that was fed by his tears.⁷

この部分は、ヒロインを描写する一文と対応関係にあると思われる。

And so she grew up, with little to eat or wear.⁸

老人は自分自身の毛にくるまれ（'wrapped'）ながら、小川に涙をくれてやって育てて（'fed'）いる。本当なら、彼は孫娘に着物を着せて食べ物を与えてやらなければならない。

凄絶とも言える悲しみの描写は大変示唆的である。涙が石をけずり水路を作る程の悲しみは芸術的ですからある。老人は悲しみを通して自然と同一化しつつあるかのようだ。ここには、悲しみが芸術を生み出す原動力となり得る事が暗示されている。

しかし、別の観点から見ると、彼はアニメにとりつかれているとも言えよう。自分の思いが呪縛となって彼は金縛りの状態に陥っている。この事は、

…… his hair has bound him a fast prisoner and he could not move.⁹

⁶ *More English Fairy Tales*, p.52.

⁷ *Ibid.*, p. 53.

⁸ *Ibid.*, p. 52.

の一文が端的に示している。

老人は死んだ娘にアニマを投影し、とりつかれてしまった存在として、我々に強烈な印象を与えている。

ヒロインは、このような老人とは対照的に描かれている。彼女はアニムスを誰かに投影するという空しい作業を止めて、アニムスを自分の心の中の存在としている。そして、それとの対話を続けていく事によって自己実現の道を歩むのである。¹⁰

(2) ぼろぎれ娘とアニムス

領主が亡き娘の中にアニマを投影するように、ぼろぎれ娘も最初は祖父の中にアニムスを投影しようとしている。その事は、娘が自分から城を出ていこうとはせず、乳母からわずかばかりの食べ物やぼろをもらっている事に示されている。年老いた乳母は、ある意味では、娘の、古いアニムス像への執着を象徴しているとも考えられる。しかし、古いアニムスに固執していても、それは自分の成長の助けとはならず、却って、逆の効果を生み出すものだという事は、召使いのしうちから明らかである。娘はついにやぶの中に身を隠す。

この後、野原や道端でくらしながら、ヒロインは新しいアニムスとの対話を続けていく。がちょう番の少年は笛吹きの名手である。娘が飢えや寒さといった肉体的苦痛を訴えると彼は楽しい曲を奏でてくれる。それを聞くと娘は苦痛を忘れて、がちょうと一緒に踊るのだった。

苦痛を即物的に解消する手だてとして、魔法が使われないのは興味深い。ここで、「少年が笛を吹くとたちまち素晴らしいごちそうとあたたかい着物が用意されていました。」というような話になっても、我々はそれほど奇異な感じを受ける事はない。むしろその方がより昔話らしいと思うかもしれない。

直接的、物質的な手段によらずに、音楽や踊りで苦痛の解消をはかろうというのは、苦痛の解消の方法としては一段高次の次元だといえよう。ここでも又、芸術の一つの役割が示唆されている。

アニマにとれつかれて嘆き悲しむ老人と、自己の内なるアニムスと会話を続けるヒロインとに、変転の兆しは同時に与えられる。

舞とう会の招待状は領主にもとどけられる。これは異常な状態にある老人にとってたち直るためのチャンスである。彼は本来の男性性をとりもどすと、自分を縛っていた毛を断ち切らせる。これは自己からの解放の可能性を示している。

⁹ *Ibid.*, p. 53.

¹⁰ cf. 河合, p. 208.

舞踏会の知らせはぼろぎれ娘の耳にも届く。彼女はいきたくてもいく事ができない。娘が城の台所で泣いているのは、まだ、古いアニムス断ち切る事ができず、何かを期待しているといえよう。乳母は領主の所へたのみに行くが、まったく相手にされない。それどころか、さんざんののしられて部屋から追い出されてしまう。

「ぼろぎれ娘」は、何かあった時に他人の力をあてにするような生き方ではいけないと私達に語っている。たよるべきものは、結局自分の中以外には存在しないのだ。

乳母の懇願も空しく、陰悪なまなざし（‘black looks’）とひどい言葉しか返ってこないのは象徴的である。海ばかり見つめていた老人には愛を込めて人を見る（＝接する）事ができなくなってしまったのだろうか。

さて、ぼろぎれ娘が、がちょう番に窮状を訴えると、彼は娘を励ます。それでも、ヒロインが、みすぼらしい自分の姿にとらわれていると、彼は笛を吹いてくれる。しかし、ここでも魔法はあらわれない。豪華な服や馬車がでてくる事もなく、ぼろぎれ娘はぼろぎれ娘のままである。とにかくこの笛によってヒロインは元気づけられ、二人は手をとり合っ踊りながら町に向かっていく。

ヒロインが気づいた時がちょう番と手をとり合っていたのは意義深い。これは双方の関係が望ましい状態にあることを示している。¹¹つまり、アニムスとの統合が順調である事、自己実現の過程において、娘が飛躍的な成長を遂げた事示している。華美な服やくつという表面的なものでとりつこうことなく、あるがままの姿で事に臨む大切さを、笛を通して娘は知った。¹²そして、この事に気づいた時、ぼろぎれ娘はぼろぎれをきたままでも、素晴らしい服を着た王子と対等にわたりあう能力をすっかり身につけている。

(3)アニムスの成長

娘は、ほどなく、かっこうのよい若者に出会う。この若者は素晴らしい服を着て馬に乗っている点で、ぼろをまとったはだしの娘とは好対照をなしている。同じ所へ行く途中だと知ると、若者は馬からおりて娘と並んで歩き出す。この若者は、あの古いイギリスの童唄^{わらべうた}に出てくる若者とは、まったく異なっている。¹³あの若者は、馬に乗ったまま娘に話しかけ、娘の父親がただの農夫で、持参金はその可愛い顔でしかな

¹¹ たとえば Milton, *Paradise Lost*, XII 巻の最後で、アダムとイヴが手をとり合っ楽園をあとにしているが、新井明氏は、これがアダムとイヴの人間関係の改復を示すものである事を指摘している。cf. 新井明訳「楽園の喪失」大修館、1978年、p. 101. Akira Arai, ‘Adam and the Redemptive History’, *The Bulletin of Tokyo Kyoiku University Literature Department* 78, 1970, p. 17.

¹² cf. マックス・リュティ著 小沢俊夫訳「ヨーロッパの昔話」岩崎美術社、1978年、p. 150.

¹³ ‘Where are you going to, my pretty maid?’ で始まる歌。cf. *The Oxford English Dictionary of Nursery Rhymes*, pp. 283–3., James Kirkup, *Mother Goose’s of Britain*, Asahi Press, 1978, pp.36–37.

いと知ると、結婚できないと言って去ってしまうのである。

りっぱな若者が馬からおりて、娘と一緒に歩き出すというのは、娘がぼろをまとったままで、若者と比べても決して遜色がないという事になる。アニムスとの統合に成功した娘は、いまや、相手の方から娘の立場に合わせてくる程に実力を貯えている。

がちょう番が笛をふくと、若者は娘の顔を何度ものぞきこんでついには求婚する。この部分は、昔話の絶妙なバランス感覚を示す一例となっている。というのは、祖父である領主は決して顔を見ないと誓って、娘をつきはなしたのだから。

若者の性急な申しこみを娘は笑ってうけ流す。ここで初めて、娘の金髪への言及があるのは、ヒロインの精神的貴族性を示すものと考えてさしつかえないだろう。¹⁴事実、ここでの娘の態度には、やんちゃぼうずをたしなめている成熟した女性の雰囲気を感じられる。

すげなくされればされる程に恋心をつのらせるのが男というものである。若者は娘に、そのままの姿でがちょうもがちょう番も一緒につれて舞踏会にくるようにという。そこで、彼女を自分の妻として公にしようというのである。

二人が出会った時、娘は道を下っていく所であり、若者は道を登ってくる所であった。これは、双方の歩みよりがあって初めて、対等な人間関係が生まれるという事を端的に示しているのではないだろうか。

又、若者が馬からおりて共に歩き、娘がそのまま妻にふさわしいと認めるくぐりはどうだろうか。これは、若者も又、成長しなければならなかったという事ではないだろうか？娘はぼろをまとっていることやだしてある事等、外面にとられる事なく事にあたっていかなければならないと知った。これと同じように、若者にも、身につけてはいるが本来自分に備わっているものではない——馬とかりっぱな服とかの——外面的なものにとられる事なく、物事の本質を見抜く事が要求される。それができた時に初めて、人間は相互に対等な関係をもてるのではないだろうか。

これを、人間相互のレベルでなく、一人の女性の精神活動のレベルでとらえれば、女性の成長と共にアニムスも又成長するという図式が可能であろう。ありのままの自分を発見できた時、人は他人をも、ありのままに見つめられるようになる。

(4)魔法(=変身)

夜中の十二時きっかりに、ぼろぎれ娘は大広間に入ってくる。かつて、台所口からさえ追い払われたヒロインが、正面玄関から堂々として入ってきて、玉座にまっすぐ向かっていく。両側にいならぶ紳士淑女がさ

¹⁴ cf. ブルーノ・ベッテルハイム著 波多野完治・乾侑美子共訳「昔話の魔力」評論社、1978年、pp. 193-194.

さやきあったり笑いこぼしたりしてもびくともしない。彼女は、もはや召使いにののしられてやぶに隠れたのと同じの幼い娘ではない。あざけりや中傷など、ものともしない成熟した女性となっている。ありのままの自分を獲得した時には、他人の評価は意味を失う。

玉座からおりてきた恋人の行動は、マックス・リュティの言う「昔話の孤立性と普遍的結合能力」¹⁵の例となっている。恋人と祖父は、話の中ではそれぞれ孤立した存在であり、相互の接触はなかった。ところが、恋人はヒロインに三度接吻する。それは、あたかも老人が娘を三度拒んだ事知っていてそれを補償するかのようである。

又、王子が娘の手をにぎったのは、王子とがちょう番の同一性を暗示していると思われる。

若者はむき直ると父親である王に、これが自分の妻であると宣言する。ぼろぎれ娘は、ぼろを着たまま、国中で一番美しく愛らしい女性として認められる。

「シンデレラ」の昔話に慣れている私達にとっては、「ぼろぎれ娘」は新鮮であり、感動も深い。私達は「外見にとらわれず本質を見極めることの重要性」をたてまえとしては知っている。しかし、同時に、現実にはそれがしばしば見過ごされてしまう事も知っている。シンデレラはまず、だれにも負けぬ美しい服を着て王子の心をとらえなければならなかった。そして、美しい服を着たシンデレラとぼろをまとったシンデレラが同一人物である事に、王子が気づくの待たねばならなかった。

傷々しい程に華美な化粧をほどこしたり、目をひく衣装に身をつつんでいる幼い——若いというよりも——私達を見るとき、この本音とたてまえの原理が支配的に働いているのに私達は気づく。今日の若者が、性急に値ぶみする事なく、せめて馬を止めて対象をじっくりとながめる余裕を持っていくる事を期待するのみである。こういった点から見ると、「ぼろぎれ娘」に登場する王子は、自律性を備えた理想的男性であると言えるのかもしれない。さて、話を本題にもどすとしよう。

王子が、宣言を終えない内に、がちょう番は笛を吹く。すると、娘のぼろ服は見事な衣装となり、頭には王冠がのせられる。そして、がちょうの群れは、りっぱなおつきの人々となる。それと分かる形で魔法が使われるのは、この箇所のみである。王子がぼろぎれ娘に恋をした背景に、笛の力があずかっている事は確かである。しかし、笛のなる以前に、彼は馬からおりて、娘のかたわらを歩いている。彼は、遅かれ早かれ娘の顔を見るに違いなかった。笛は、そのきっかけを与えているにすぎない。

この理屈でいけば、ここで笛が鳴ったからといって、ぼろぎれ娘が変身する必然性はないように見える。王子がそうしたように、王もまた、ぼろをきたままの娘を嫁として迎えていいのではないか。衣装などその後で着替えればよい。王子が妻として認めた後で、これ以上美しくなっても仕方ないのではないか。

このように考えてくると、「ぼろぎれ娘」では、魔法が何ら決定的な役割を果たしていないと言えるかもし

¹⁵ リュティ, pp. 67-119.

れない。そして、大づめで娘の変身もってつけたもののように見えてくる。

しかしながら、一方では、娘の変身は、いままでにおさえていたものが、せきを切ってあふれ出てきたという感がある。私には、これがクライマックスを飾るにふさわしい、必要不可欠な要素なのだという気がしてならない。

つい最近まで、テレビは魔女番組の花ざかりであった。現代のように科学の力が巨大になって、一時代前の生活と比べれば、現代の生活それ自体が魔法ともみまごうような時代にあっても、魔女は魅力を失わないものらしい。却って、あこがれはますますつのるように見える。これら魔女番組のヒロイン達の殆どが、人間の世界で人間と生活を共にしている。特に幼い子供がヒロインとなっている場合には、人間の世界に留学する事が、将来りっぱな魔女となるための大切な修行の一つとなっている。そして、そこでは、なるべく魔法を使わずに、自分の力で物事を解決していく事が、試練として課せられている。ヒロイン達は、呪文をとさえれば一飛びの山へ自力で登ったり、ひん死の病人を背負って歩いたりしなければならぬ。幼い視聴者達は、ヒロインの行動を息をつめて見守りながら声援を送るのである。こういう意味で、「魔法使いサリー」などは、叙事詩的な児童番組であると言えるのではないだろうか。その証拠と言っては何であるが、この番組は何度再放送されても新鮮さを失わず、我々大人にまで訴えかけてくるのである。

魔女の子が、ひとたび呪文をとさえればすぐに解決できる事を、自分自身の力で解決していくという事は、一見ばかげた事のように見えるが、実は重大な点である。魔女の子といえども、魔法を使いこなせるようになる為には、それにふさわしい魔女に成長しなければならない。未熟な人間が、巨大な力を持つ事の危険性は、身近を見回すだけでも無数にころがっている。このような番組が特に現代の子供に必要である事も、科学万能の世の中で、文明の利器を凶器として使い誤らぬようにという人類の無意識的な配慮によるものだと思われる。

今、上でのべてきたのと同様のことが「ぼろぎれ娘」を貫いている魔法のあり方にも言えるのではないだろうか。娘が寒さや飢えを訴えた時、がちょう番がすぐさま食べ物や着物を与えていけば、一時的な満足は得られたかもしれない。しかし、娘の成長はあり得なかったはずである。又、魔法で舞踏会の為の服やくつがそろったとしても、精神的に未熟なままでは、王子にふさわしい妻にはなれなかったのではないだろうか。いたずらに同情して、娘の望む事をかなえてやったのでは、かえって娘の成長を阻む事になったであろう。王妃となる者には、貧しいものやあわれな者に対する思いやりがなくてはならない。最初から望むものがすぐに手に入るような生活をしていけば、そのありがたみも分からなくなったであろう。

様々な危険を乗り越え、自己実現の道に精進した娘が、成熟した女性となり、魔法の意味を誤解するおそれもなくなった時に、初めて変身をとげるという事は、非常に意義深いことであるといわざるを得ない。

(5) anti-hero の意味するもの

ぼろぎれ娘の祖父も、舞踏会に招かれていて、一部始終を見たはずである。彼は孫の幸せを手をとり合って喜ぶことはできず、一人で帰途につく。その顔を決して見ないと誓ったからである。彼は自分で行った誓いのせいで窓辺で海を見ながら前よりも一層ひどく嘆き悲しんでいなければならない。恐らくは——最後のパラグラフの動詞がすべて現在形で終わっている所を見ると——この世の終りまで。

昔話では、通常、主人公以外の登場人物は役割を終えると姿を消す。この話でも、乳母やがちょう番の少年がそうである。又、結末で言及があるような場合には、主人公と和解するか、主人公にひどい仕うちをしたその罰をうけるかである場合が多い。前者の例として、たとえば同じジェイコブズの集録になる「ねこ皮娘」の場合¹⁶には、男の子を望んでいたのに女の子が産まれて、腹をたてた父親は、ヒロインを乞食の老人にくれてしまうが、後にはすっかり改心して、娘やその家族と一緒に幸福にくらす事になる。後者の例として「白雪姫」の義母や「シンデレラ」の義母、義姉妹は余りにも有名である。

他人を呪えば、呪いが必ず自分の身にふりかかってくるという点では、「ぼろぎれ娘」の祖父の嘆きも、「白雪姫」の義母の刑罰も、本質的には同じなのかもしれない。

しかし、老人の受けた罰は、罰と呼ぶには余りに精神的なものである。そして、この罰は誰か他人から受けるのではない。文字通り自分が自分に下している罰である。自己の呪縛を受けていた老人にも、解放されるチャンスはあった。それが王様からの舞踏会への招待だった。この時彼は、召使いを呼んで、自分を縛っていた髪の毛をたち切らせた。この時に、もう一歩はずみをつけて、乳母の願いを聞き入れていれば、彼も幸福になれたのかもしれない。この時点で、乳母は、彼が対話すべきであった彼自身のアニマをも象徴していたともいえる。しかし、彼は、彼女をにらみつけると黙れと命じたのである。

死んだ娘にアニマを投影し、自分の内なるアニマとの対話を避け続けた老人の生き方は、ぼろぎれ娘とは対照的である。そして、この対照性は、この箇所のみではない。たとえば、娘がぼろぎれをまどってはだしのまま歩いて王宮に向かったのに対し、領主はごうかな衣装と宝石を身につけると金らんどんすのくらをおいた白馬に乗って王宮に向かう。そして、ぼろぎれ娘が幸福の極みにある時に、彼は海を見て泣いていなければならない。

「ぼろぎれ娘」に表われるこの対照性は、単にヒロインの生き方を一層鮮明にさせるという補助的な役割以上のものを持っている。たとえば、「シンデレラ」における義理の姉二人の役割は、主人公の肉体的、精神的美しさを強調する補助的なものであるといえよう。彼らは、世俗的な罰をうける事によって、シンデレラの支配する世界に統合されている。しかし、「ぼろぎれ娘」の領主は、ぼろぎれ娘の支配する世界とは

¹⁶ *More English Fairy Tales*, pp. 112—118.

野呂有子「英国昔話『ぼろぎれ娘』に関する覚え書」『東京成徳短期大学紀要』第13号（昭和55年）27-34.

異なる、孤立した世界を持っている。そして、彼の世界は、ぼろぎれ娘の世界には決して統合されることはない。この事は、「ぼろぎれ娘」の文体にも明白に示されている。それは前にも指摘した事だが、他の文がすべて過去形で語られているのに対し、領主を叙述する終りの三行は、現在形で語られているという事である。

それでは、領主の支配する孤立した世界とは、あれだけ自己実現に精進したヒロインにも統合できない世界とは、何を意味しているのだろうか。

これは、老いる事の悲しみに他ならないのではないだろうか。年老いた領主にとって、最愛の娘の死は、たちあがる事のできない程の打撃だったのではないだろうか。若いぼろぎれ娘には母の死を乗り越えていくだけの力が備わっていたが、年老いた領主に娘の死を乗り越えろと言っても、それは残酷な事であろう。娘の死は彼の心をかたくなにさせ、あのような誓いをさせてしまった。そして、このかたくなさは、孫娘と和解するチャンスがおとずれても、彼をしばってはなさない。彼は、このかたくなさを誰とも分かち合う事もなく、一人で耐えていかねばならない。

「ぼろぎれ娘」は、領主の姿を通して誰にも訪れる老いの悲しみを語っている。老いの悲しきは、各人が、一人一人耐えていかねばならないものではあるが、それは又、人類にとって普遍的な悲しみでもある。老人の涙が流れ込んでいく海は、普遍的無意識を象徴する。¹⁷又、老いの悲しみに限らずとも、人間の出会う様々な悲しみや苦しみの中には、統合する事の非常におずかしいものもあるのではないだろうか。

領主には、何度か悲しみを克服できる機会が与えられていた。最初に乳母が赤ん坊を見せに来た時、孫を舞踏会へつれていってくれたのまれた時、そして舞踏会で、王子の嫁選びに立ちあった時である。しかし、彼はすべての機会を棒にふるってしまった。そうする事しかできなかったのであろう。このような悲しみに対しては、いたずらに解決を急がず、ただ時がすべてを押し流してくれるのを待つ事が最善の策であるのかもしれない。無理に解決しようとするれば、前よりも一層悪い結果をもたらすのでであろう。「ぼろぎれ娘」の領主のように。

参考文献

小沢俊夫「世界の民話」中公新書、1978年。

相沢博「メルヘンの面白さ」中央大学出版部、1973年。

M-L・フォン・フランツ著、秋山さと子・野村美紀子「メルヘンと女性心理」海鳴社、1979年。

小沢俊夫編「日本人と民話」ぎょうせい、1976年。

河合隼雄・藤田統・小嶋兼四郎「母なるもの」二玄社、1979年出版。

¹⁷ 「人間と象徴」下巻、p. 31.

野呂有子「英国昔話『ぼろぎれ娘』に関する覚え書」『東京成徳短期大学紀要』第13号（昭和55年）27-34.

河合隼雄「母性社会日本の病理」中央公論社、1978年。